

生長の家環境マネジメントシステム 2023年度 環境パフォーマンス報告書



人々の暮らしに寄り沿う「生長の家オープン食堂」

ISO14001国際規格に基づき、2023年度（1月～12月）の生長の家における環境パフォーマンスを報告します。

発行：2025年4月12日

作成：宗教法人「生長の家」 国際本部環境共生部

担当：環境共生部（河野）

問い合わせ先：山梨県北杜市大泉町西井出8240番地2103

TEL：0551-45-7747（直通）

目次

1. 啓発活動	
新年のビデオメッセージ、動画リンク集、書籍・月刊誌.....	3頁
P B S（プロジェクト型方式）の活動.....	4頁
インターネットでの啓発、家庭での取り組み.....	5頁
2. 社会貢献活動	
各地で「オープン食堂」が活発に.....	6頁
ウクライナに“あたたかい“を贈ろう.....	7頁
社会貢献等の啓発活動 （オープン食堂、W F P、緊急支援募金、脱原発、防災D A Y、日時計温泉）	8頁
森林保全活動への寄付と飢餓救済募金.....	9頁
3. 炭素ゼロ運動	
全国66事業所における炭素ゼロ運動の成果.....	10頁
自然エネルギー拡大運動.....	11頁
メガソーラー、会員努力のCO ₂ 削減、電気自動車.....	12頁
オフグリッド、ZEB（ゼロ・エネルギー・ビル）.....	13頁

新年のビデオメッセージ、動画リンク集、書籍・月刊誌

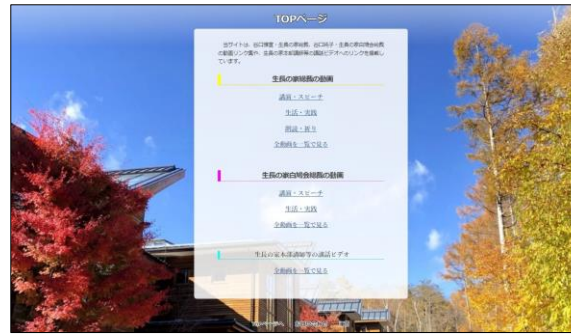
生長の家では、「神・自然・人間は本来一体である」という宗教的真理に基づいて、人々のライフスタイルを自然と調和した持続可能なあり方に転換して行くことを目指し、地球環境問題の解決に貢献する生き方を推奨しました。

新年のビデオメッセージ



2023年1月1日、谷口雅宣・生長の家総裁の新年のビデオメッセージを、生長の家公式サイトで一般に公開。メッセージの中で、地球温暖化による気候変動が深刻化する中で、ウクライナ危機などにより、物価高騰、景気後退、政治不安、難民急増などが引き起こされ、世界が二分しています。そのような中、生長の家は、地球上の生物と鉱物も含めた“地球生命”全体を「掛け替えのない共同体」と考え、困難な時代においても、「神・自然・人間は本来一体である」というメッセージを世界の常識にまでするという「希望」を持って生きる重要性について話されました。同ビデオは、英語、ポルトガル語、中国語、韓国語、スペイン語、ドイツ語の6言語の字幕入り動画も同時に公開しました。

SNI-動画リンク集



谷口雅宣・生長の家総裁、谷口純子・生長の家白鳩会総裁の動画リンク集や、生長の家本部講師等の講話ビデオへのリンクをまとめたウェブページです。

新型コロナウイルス感染拡大防止のために、生長の家講習会をはじめ、講演会、練成会、誌友会等の対面の行事を開催することが難しい状況の中、この取り組みは生まれました。

掲載の動画は、環境保全の啓発、また明るい人生を築くための指針や活力として、自己研鑽やネットフォーラム等において積極的にご利用いただきました。

生長の家の動画リンク：

<https://snivideolinks.ubemstudygroup.com/>

書籍・月刊誌



谷口雅宣・生長の家総裁監修の『“新しい文明”を築こう（上巻）基礎篇「運動の基礎」』（写真左）、谷口雅宣・生長の家総裁著の『二百字日記1』、谷口純子・生長の家白鳩会総裁著の『夢の地平線』等の書籍の頒布を通じて、自然と人がともに繁栄する“新しい文明”のライフスタイルへの転換を促しました。

また、生長の家の組織会員向けの月刊誌（機関誌『生長の家』）、一般向けの月刊誌『いのちの環』（総合誌）『白鳩』（女性誌）『日時計24』（青年誌）（写真右）に、毎号、環境保全に関する記事を掲載しました。

PBS（プロジェクト型方式）の活動

生長の家では、人間の欲望追求のために自然を破壊し、地球温暖化による気候変動を引き起こしている“古い文明”から、自然の繁栄が人間の繁栄となる“新しい文明”への転換を促すために、PBS（プロジェクト型方式、以下の3つの部）によってその価値観と低炭素のライフスタイルを生活の中で実践しています。ミニイベントの開催やインターネット上のFacebookなどのSNSを使って広める活動に取り組んでいます。

SNIオーガニック菜園部



「食卓から未来を変える」日本教文社刊
「SNIオーガニック菜園部」の活動紹介の本

SNIオーガニック菜園部は、「ノーミート、低炭素の食生活」を実践し、普及するPBSです。メンバーがノーミートの食生活を心がけることはもちろん、野菜や穀物については、有機農法によってベランダや家庭菜園で自ら栽培することに挑戦し（写真参照）、それらを収穫し食すことで、地域と季節に即した自然の恵みの有難さを味わい、地域の人々とも共有しています。

また、購入する食材は、有機無農薬で、地産地消・旬産旬消のものを選ぶことを勧めています。

SNI自転車部



「自転車から平和を」日本教文社刊
「SNI自転車部」の活動紹介の本

SNI自転車部は、「省資源、低炭素の生活法」を実践し、普及するPBSです。自転車はガソリン車の燃料となる化石燃料を使わず、CO₂を排出せずに移動できる大きなメリットがあります。この自転車を生活の中で活用することで、二酸化炭素の排出を抑制し、地球環境保全に大きく貢献することができます。

また、上達する喜び、風を切って走る爽快感は子供も大人も、国も超えて世界共通です。自転車の利用（写真参照）で心豊かで健康的な毎日を送ることができ、その意義と楽しさを世界に伝えることによって世界平和を目指しています。

SNIクラフト倶楽部



「手づくりが世界を救う」日本教文社刊
「SNIクラフト倶楽部」の活動紹介の本

SNIクラフト倶楽部は、「自然重視、低炭素の表現活動」を実践し、普及するPBSです。メンバーは、箸や写真立て、本箱、小物入れ用のポーチなど、生活の中で手にする身近なモノを、自分の手でつくっています。（写真参照）モノづくりに欠かせない“素材選び”は、木材なら国産材、植物や動物から分けてもらえる天然繊維の糸や布など、自然重視の選択をします。安く・早く・楽に手に入る大量生産、大量消費の消費生活から、身の回りのモノを大切に生かす、丁寧なライフスタイルを広めています。

インターネットでの啓発、家庭での取り組み

生長の家では、インターネットを活用した啓発活動に取り組みました。また、生長の家の会員、信徒には、信仰に基づく倫理的な生活者として、『日時計日記』と「生活の記録表」の活用等を通して、低炭素なライフスタイルへの転換を奨め、地球環境問題の解決に貢献する生活実践に取り組みました。

インターネットを活用した啓発



生長の家公式サイトを活用し、低炭素のライフスタイルの普及とそれを実践するPBSの活動を前面に打ち出しています。

また、SNI-動画リンク集の谷口雅宣・生長の家総裁、谷口純子・生長の家白鳩会総裁の動画や、生長の家本部講師等の講話ビデオをインターネット上（FacebookやZoom等）で視聴して、参加者同士が感想や意見を交換する生長の家遠隔情報交流会（生長の家ネットフォーラム）を開催し、積極的に啓発活動に取り組みました。

写真：生長の家公式サイト のトップページ

『日時計日記』と「生活の記録表」の活用



『日時計日記』（2023年版）



「生活の記録表」（2023年版）

谷口純子・生長の家白鳩会総裁監修の『日時計日記 2023年版』（生長の家刊）を活用して、その日の「環境に配慮したこと」の記載や「生活の記録表」を用いて記載することを推奨しました。会員、信徒などを対象に「生活の記録表」（生長の家国際本部発行、32,000部）を活用し、電気、ガス、水道、灯油、ガソリンの消費量とCO₂排出量を記録し、自宅に太陽光発電装置を設置している場合には、その売電量に見合うCO₂削減量も加算することにして、前年と比較してCO₂排出量の削減に取り組みました。

また、2016年4月からの電力の自由化に伴い、原発や火力発電所由来ではなく、環境負荷の少ない再生可能な自然エネルギーからの電力の調達比率が高い新電力を選択することを推奨しました。「生活の記録表」の配布による家庭でのCO₂排出削減の取り組みは2001年度から継続しています。

社会貢献活動（各地で「オープン食堂」が活発に）

「生長の家オープン食堂」は地域に根ざして人々の暮らしに寄り添うという宗教本来の役割を果たすため、地域の交流の場になることを目指しています。ノーミート、地産地消、旬産旬消、有機食品で愛情込めて作られた食事を“共食”し、人々の心身を癒やす場となっています。メニューや雰囲気が高く評価で、信徒以外でも常連の参加者が来てくださっています。



「オープン」は「誰にでも開放された」という意味です。



ボランティアで集まった愛情溢れるスタッフ。保健所の指導を受けて行っています。



家庭菜園で採れた有機野菜などを食材として使用しています。



誰かと食事をする“共食”は、心身への良い影響あることが分かっています。



「ごはん」「具たくさんみそ汁」「大豆たんぱくブロックの甘酢あんかけ」「サラダ」「漬物」



国産の有機野菜、調味料を使った「ちらし寿司」「お吸物」「ほうれん草のごま和え」

社会貢献活動（ウクライナの冬に“あたたかい”を贈ろう）

厳しい冬を迎えたウクライナに「一般社団法人全国心理業連合会（全心理）ウクライナ『心のケア』交流センターひまわり」が主催する「ウクライナの冬に“あたたかい”を贈ろうプロジェクト」に協力して、国際本部の職員と日本各地の有志の方々とでPBSのイベントを開催し、支援物資を贈りました。



主催者がFacebookページで共催者を募集後、共催者が身近な人に協力を呼びかけました。



ウクライナ避難民のご家族、知人から必要な物資を聴き取った支援物資リストを作成。



共催者は周囲の人と協力し、割り当てられた物資を購入しました。



支援物資の整理や箱詰め作業を本部職員と首都圏に居住する信徒有志で実施いたしました。



全国各地から届いた支援物資の箱を開封し、内容を確認して再度、箱詰めしました。



79軒のウクライナのご家庭へ支援物資を発送いたしました。

社会貢献活動（ウクライナ緊急支援募金、トルコ・シリア大地震緊急支援募金、リビア洪水緊急支援募金、フードバンク等）

生長の家では、ウクライナ緊急支援募金、トルコ・シリア大地震緊急支援募金、リビア洪水支援募金、フードバンクなどの取り組みを通して、社会貢献活動を行いました。

WFP（ウクライナ緊急支援募金）



WFP協会の職員3人が“森の中のオフィス”に来訪し、「ウクライナ緊急支援募金」で集まった寄付金の一部（7,226万円）をWFP協会に送金したことに対して、「感謝状」が授与されました。

同協会職員によると、寄付金などにより約300万人に対してパン、米、油などの食糧支援、現金や食料引換券での支援を実施していることが報告されました。

さらに、エネルギーインフラへの攻撃も始まり、電力が50%不足した状態で厳しい冬を迎え、今なお支援の手が必要なことなどが報告されました。

トルコ・シリア大地震緊急支援募金 リビア洪水支援募金



トルコ南部を震源とする大地震では、トルコ、シリア両国を合わせて5万2000人を超える犠牲者が出て、両国合わせて1,800万人が住居を失いました。

生長の家では、2023年3月1日～4月30日にかけて、トルコ・シリア大地震緊急支援募金を実施し、累計3,651万8,035円をWFP（国際連合世界食糧計画WFP協会）、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に送金しました。

また、アフリカ北部のリビアでは、記録的な大雨に見舞われたことで、老朽化したダム2つが決壊し、洪水が発生しました。こちらも、2023年9月21日～11月30日にかけて、「リビア洪水緊急支援募金」を実施しました。

フードバンク山梨と 北杜市社会福祉協議会への協力



生長の家国際本部では、フードバンク山梨と北杜市社会福祉協議会のボランティアに参加しています。国際本部の職員から集めた食料は、フードバンクの場合北杜市を含む県内各地のご家庭（現在約200世帯）に月2回届けられ、社協でも支援が必要な北杜市内のご家庭（約10世帯）に月2回届けられています。両施設とも、対応された担当者の方から、「いつもありがとうございます。」と感謝の言葉を多くいただいています。フードバンク山梨の担当の方によると、最近の物価高騰の影響か、経済的に厳しく支援が必要なお届け先は増えて来ているが、フードバンクへの支援品の提供は以前より減ってきているとのこと。引き続き、困窮している方々、子どもたちへのご支援に力を入れて参ります。

社会貢献活動（WWF 森林保全募金、一汁一飯、WFP 飢餓救済募金）

生長の家では、飢餓救済を目的とし、一杯のご飯と味噌汁だけにする「一汁一飯」に取り組み、WFPへの寄付を実施しています。
また、森林の減少を少しでも食い止めるため、WWF ジャパンによる森林保全活動に寄付を行って支援をしています。

WWF の森林保全活動に寄付



生長の家では、WWF ジャパンによる「インドネシア森林保全プロジェクト」に寄付しました。「生物多様性保全募金」の総額は、1,835,900円でした。この寄付金により、インドネシアのスマトラ島のテツ・ニロ国立公園周辺およびその周辺地域において、森林パトロールや森を生かした生計手段の普及などを行い、森林の減少を2,000haから578haに食い止めたり、ボルネオ島では、森の中に30台の自動撮影カメラを設置して調査を実施し、ボルネオゾウが13頭前後住んでいることを把握したり、小規模農家の組合を結成し、環境に配慮したパーム油生産を支援しています。

写真：森を守る次世代を育てる環境教育の実施

「一汁一飯」で飢餓救済に寄付



生長の家「森の中のオフィス」の職員食堂では、2014年4月から、環境問題は資源や飢餓の問題と密接に関係しているとの観点から、世界の飢餓に苦しむ人々に心を寄せ、毎月1回「一汁一飯」の日を設け、減らした食材費で1食300円を寄付する活動を始め、取り組みは生長の家の世界の各拠点に広がっています。2023年度の寄付金額は189,000円（630食分）になり、民間協力の窓口である認定NPO法人国連WFP協会を通じて国連WFP本部（ローマ）に寄付をしています。

写真：一杯のご飯と味噌汁だけの「一汁一飯」

クリック募金で飢餓救済に寄付



生長の家の産業人の組織である生長の家栄える会では、同会公式サイトで「飢餓救済クリック募金」を運営し、ユーザーがクリックをすると、協賛している企業等より、毎月そのアクセス数に応じた金額がNPO法人国連WFP協会を通じて国連WFP本部（ローマ）に寄付され、飢餓に苦しむ人々に食糧が届けられる仕組みを作り、活用しています。2023年度の寄付金額は、810,745円（協賛企業13社）となりました。

飢餓救済クリック募金

<http://www.jp.seicho-no-ie.org/kiga/index.html>

6 6 事業所における“炭素ゼロ”運動の成果

生長の家では、2007年度から教団の活動に伴うCO2排出量を実質的にゼロにする“炭素ゼロ”の運動を展開してきました。過去16年間で進めてきた“炭素ゼロ”の運動は、ISO14001の取り組みによる継続的改善などによって2023年度も成果を上げることができました。

主要3事業所が16年連続で達成



2023年度の主要3事業所（国際本部、総本山、宇治別格本山）におけるエネルギー起源8項目（電気、都市ガス、LPガス、灯油、A重油、ガソリン、軽油、上下水道）のCO₂排出量、並びに職員の出張・外勤の移動や本部主催の行事参加者の移動に伴うCO₂排出量は、2007年度から16年連続で“炭素ゼロ”を達成しました。

炭素排出量	180,341.1	kg-CO2
炭素相殺量	-2,034,821.2	kg-CO2
総合計	-1,854,480.1	kg-CO2

写真：宇治別格本山（京都府宇治市）が京都府綾部市に建設したメガソーラー発電所（1,255kW）

他61事業所も合算で“炭素ゼロ”



2023年度の国内の事業所（教化部・練成道場）計61カ所におけるエネルギー起源8項目等のCO₂排出量の総合計は、昨年につき、排出権を購入することなく相殺することができ、“炭素ゼロ”を達成しました。

炭素排出量	499,997.8	kg-CO2
炭素相殺量	-3,122,230.3	kg-CO2
総合計	-2,622,232.5	kg-CO2

※炭素相殺量とは太陽光発電の売電分、森林吸収分、自然エネルギー拡大募金による削減分などによって見込まれる炭素削減量のこと。

写真：岡山県教化部会館（岡山市）の太陽光発電装置（30kW）

省エネ、再エネ利用による削減



左記の“炭素ゼロ”の達成の要因としては、各事業所の省エネの取り組みが着実に進んでいること、電力購入先をCO₂の排出係数の低い新電力へ切り替えていること、事業所の太陽光発電の発電による炭素削減効果、事業所が所有する森林のCO₂吸収量による炭素削減、植樹植林等の会員努力（次頁参照）、メガソーラー・大規模ソーラーの発電による炭素削減量（次頁参照）を、各教区からの自然エネルギー拡大募金の口数に応じて配分したことなどが奏功しています。

写真：福島・西郷ソーラー発電所（福島県）

自然エネルギー拡大運動を推進

生長の家では、人類社会が自然エネルギーを全面的に利用することによって「脱原発」と「地球温暖化の抑制」を実現し、自然と人間がより調和した生き方を実現することを目的として、自然エネルギー拡大運動を展開しています。

自然エネルギー拡大募金を継続



2014年7月1日から開始した「生長の家自然エネルギー拡大募金」では、2023年度は、522口、5,220,000（2023年1月1日～12月31日）の募金が集まり、累計金額では590,430,000円となりました。

2017年からは、現地の太陽光パネルには寄付者名（希望者）を銘板に掲示することに加えて、日本語版ウェブサイトでも寄付者名を閲覧できるようにしました。

写真：自然エネルギー拡大募金のウェブサイト
<https://www.jp.seicho-no-ie.org/naturalpower/>

大分・別府地熱発電所が稼働



大分県別府市に教団初の地熱発電所を2020年10月から稼働し、2023年も稼働を継続しました。

発電出力は50kW、2023年度の年間実発電量は、133,652kWhでした。地熱発電は、24時間発電できるため、設備利用率は80%以上で、太陽光発電(12%)より効率のよい発電ができています。隣接する大分県教化部会館にも、電力と地熱発電利用後の余剰エネルギーである温泉水の熱を提供しています。

地熱発電は1年を通じて一定量を発電できるという安定性があり、ベースロード電源に位置づけられます。

写真：生長の家大分・別府地熱発電所（別府市）

自然エネルギー利用への助成



自然エネルギーの利用を促進するために、組織会員を対象に、太陽光発電・小型風力発電装置、リチウムイオン蓄電池、電気自動車の導入に際して、助成金を支給しています。

【2023年度の助成の実績】

- ◆太陽光発電装置の導入件数
16件：助成金額 1,964,000円
※発電出力1kWあたり2万円
- ◆電気自動車の導入件数
25件：助成金額 6,387,000円
※1台上限30万円、本体価格の10%まで
- ◆リチウムイオン蓄電池の導入件数
25件：助成金額 1,970,000円
※1kWhあたり1万円

生長の家のCO₂削減の活動

生長の家の京都・城陽メガソーラー発電所、福島・西郷ソーラー発電所、大分・別府地熱発電所及び国内の事業所の太陽光発電装置によって、二酸化炭素排出削減が進み、教団全体のカーボン・オフセットに大きく貢献しています。

大規模ソーラーの炭素削減量



生長の家が建設した京都・城陽メガソーラー発電所（2015年3月稼働）、福島・西郷ソーラー発電所（2015年12月稼働）、大分・別府地熱発電所（2020年10月稼働）の3カ所の2023年度の発電量は以下の通りとなりました。

【2023年度の発電量】

京都・城陽メガソーラー発電所：1,996,196 kWh
（一般家庭の約693世帯分に相当）
福島・西郷ソーラー発電所：855,079 kWh
（一般家庭の約297世帯分に相当）
大分・別府地熱発電所：133,652 kWh
（一般家庭の約46世帯分に相当）
3発電所の発電量の合計：2,984,927 kWh
（一般家庭の約1,036世帯分に相当）
3発電所によるCO₂削減量の合計：1,090,086 kg-CO₂（杉の木の年間CO₂吸収量に換算すると77,863本分に相当）

生活の記録表の活用等の 会員努力によるCO₂削減



2020年度より、生長の家として「教化部敷地その他、会員の努力による二酸化炭素削減」を評価することが決定され、教化部等の敷地内の森林、会員の森林の所有、植樹・植林、生活の記録表提出による炭素削減量が炭素相殺に用いています。

2023年度は、1,759,122kg-CO₂（杉の木の年間CO₂吸収量に換算すると、125,652本分に相当）の炭素削減が評価されました。なお、生活の記録表の教区の提出状況については、2022年度の42教区に対して、2023年度は46教区であり、4教区増加しました。また、生活の記録表の会員の提出状況は、2022年度の1,200名に対して、2023年度は1,486名となり、286名（19.2%）増加しました。
1世帯：2,720kgCO₂ 杉1本：14kgCO₂で計算

電気自動車の導入の促進 急速充電器を無料で開放



生長の家では、電気自動車（EV、電気マイクロバス）、急速充電器、V2H等を導入し、車両の移動に伴うCO₂の排出量抑制に努めています。全国各地の事業所では、急速充電器の設置と無料開放を進めています。

生長の家の組織会員に対して以下の助成を行っています。

- ・電気自動車の導入時に1台30万円を助成しています。
- ・定置用リチウムイオン蓄電池1kWhあたり1万円を助成しています。
- ・太陽光・小型風力発電に1kWあたり2万円を助成しています。

※助成には、所定の条件があります。

オフグリッド、ZEB（ゼロ・エネルギー・ビル）等の成果

生長の家“森の中のオフィス”は、当初からゼロ・エネルギービル（ZEB）として建設され、2020年には、大容量の蓄電池を“森の中のオフィス”に増設して、電力会社の配電網と連携せず、自然エネルギー100%で運用する「オフグリッド」のシステムを構築しました。このコンセプトを国内の教化部会館などの建て替えに順次適用させています。

“森の中のオフィス”（山梨県北杜市）



生長の家“森の中のオフィス”

2020年から、大容量の蓄電池（3,648kWh）を“森の中のオフィス”に増設して、電力会社の配電網と連携せず、自然エネルギー100%で運用する「オフグリッド」のシステムを構築しています。2023年の年間の発電量は、504,974kWhでした。

福島県教化部会館（福島県郡山市）



福島県教化部会館

2020年1月、教団初となるオフグリッドシステム（電力会社とつながずに電力を自給するシステム）を導入した建物を建設し、2023年度も継続して運用しました。2023年度は、発電量96,103kWh、使用量は22,963kWhでした。

メディアセンター（山梨県北杜市）



生長の家メディアセンター

2023年度のメディアセンター（出版・広報部門のオフィス、スタジオ兼ギャラリー）の電力年間集計では、“森の中のオフィス”同様、発電量が使用量を上回り、ZEBを越えてPEBを達成しました。年間の発電量50,463kWh、使用量25,189kWh、買電量22,814kWh、売電量は

茨城県教化部会館（茨城県笠間市）



茨城県教化部会館

2023年度の茨城県教化部会館は、発電量が使用量を大きく上回り、ZEBを越えてPEBを達成しました。年間の発電量57,551kWh、使用量33,196kWh、買電量23,710kWh、売電量は44,470kWhでした。

※PEB（ポジティブ・エネルギー・ビル） 48,088kWhでした。
年間のエネルギー消費量を上回る発電を行う建築物